
銀の系譜

橘明

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

銀の系譜

【Nコード】

N9622A

【作者名】

橘明

【あらすじ】

…時は戦乱の世。平和な笹葉の里に、銀という名の小鬼が住んでいた。鬼である事を隠して、平和にひっそりと生きていた銀だったが、彼の身近で鬼の仕業による陰惨な事件が起こり始める。そんなある日鬼退治の専門家と名乗る男が現れた。

笹葉の小鬼01

笹葉の山には鬼がいるとよ

銀色の髪に 赤い目だとよ

月夜の晩に人食らうとよ

山の麓のおやしるで、村の童達が輪をかいて歌っている。

銀は池のほとりの松の木の上で、居眠りしながらそれを聞いてた。秋の半ばのすずしい一日。村は今刈り入れの真っ最中でみんな大忙しだ。けど銀には関係ねえ。なにしろ銀は流れ者だから気楽なもんさ。

ぐうぐういい気持ちで寝てるうちに、木の枝からうっかり落ちてしまふ。あんまり高いところで寝てなかったら、けがはせずにはすんだがよ、したたか腰打って「あいだだだだ」って言いながら銀はひよいと池をのぞいた。そこには銀色の髪に真っ赤な目をした長え角の小鬼が映ってる。それで、銀はびっくりこいて辺りをきよときよと見回した。…幸い誰も近くにいなえようだ。

池に映ったのは、まぎれもねえ銀の姿じゃ。銀は小鬼なんじゃ。

けど、このままじゃまずい。「あれ」どこ行つた？ 「あれ」じゃ、「あれ」じゃ、オレの大事な破邪の輪じゃ…

銀は草をかき分け必死で探した。そいでな、さっきまで寝ていた松の木の根元でようやくきんきら光る輪つかを見つけてな、「あれじゃ、あれじゃ」と駆け寄りそれを手に取った。

「ああよかった」

銀は心底ほつとして、輪つかを頭にすぽつとかぶせた。そしたら、あら不思議！ 銀の髪も目ん玉も絵の具かけたみてえに黒々染まり、長い角も見る見る引っ込んで、どっからどう見てもどこにでも居る普通の村の童に姿を変えた。

「これで大丈夫だ。村の奴らにつかまる心配ない」

と、銀はすっかり安心すると、松の木によじ登りぐうぐういび

きをかきはじめたんだと。

笹葉の山には鬼がいるとよ

銀色の髪に 赤い目だとよ

月夜の晩に人食らうとよ

…まったく、誰が考えついた歌なのやら…。

ざくざくと山道をくだりながら、莊助はつぶやいた。

ここは笹葉の山さ。童達の歌う山さ。けど、誰も鬼を見たもんなんていやしねえ。ただの歌さ。でも、なんとのう気味悪いなあ…。

なにしろ、人里遠い山道は真つ暗で、頼りになるもんといえればちようちんの明かりと、木々のすきまから時々顔見せるお月さんの光ぐれえだ。だいの大人の莊助でもちいとばかり心細くなって来る。

…なに、大丈夫さ

と莊助は自分に言い聞かした。

…鬼なんてものは都とか、戦場とか血なまぐさいとこ好むけえ。平和なおらが里に出るわけねえわな。

そう、戦乱の世というのに、このあたりはのほんと平和だ。この数十年血なまぐせえ事など一度も起きてねえ。めでたい事だ。ずっと、このまま平和にくらせればとな、みんながそう思ってる。いや、ずっと平和にちがいねえさ。そうに決まってる。なのに、なんだろう？ この妙な胸騒ぎは？

がさがさ…

森の奥の方から音がした。

…獣かよ？

と、莊助は辺りを見回した。そして、さっきからずつと感じてた違和感の原因に気付いた。

静かすぎるんじゃない。ふくろうも、獣も、虫けらまでもが息こらすみてえにしーんとしてる。

…ありえねえ。

莊助は思った。この山の事は子供の頃からよう知ってるが、この季節にこんな静かな事はありえねえ。

笹葉の山には鬼がいるとよ

銀色の髪に 赤い目だとよ

童達の歌を思い出し、莊助はぶるつと身震いした。とんでもなく恐ろしい予感がする。莊助は転ぶように走り出した。

ちようちん振り回して、髪振り乱して、大木の間をどんどん走っていく。足音だけがバタバタ、バタバタ響いてる。ぜいぜい息きらして前を見ると、遠くに村の明かりが見えて来た。

…助かった！

莊助は一瞬喜んだが、ふと横を見てぎよつとした。なぜなら、自分の横を同じ早さで飛んでいく2つの赤い光に気付いたからじゃ。

莊助が立ち止まると、赤い玉もぴたつと止まった。

…なんじゃあ？ あれは？

訝しげに見てると、闇の中でしゅしゅしゅと唸る声がある。獣か？ いや違う。あんななき方する獣なんていやしねえ。…これは…これは…！

莊助は身の毛がよだつのが感じた。逃げなきゃと思うのに足ががくがくして動けねえ。蜘蛛の巣にひっかかった虫みたいに、逃げる事ができないんじゃない。

でな、莊助ががくがく震えてるとな、闇の中からにゅーつと腕が出て来てな、莊助の首をつかんでな、そしてな…

笹葉の小鬼02

いつつも子どもが遊び場にしているおやしらの境内に、今日は大人どもが集まっとなる。男も女も若いのも年寄りもいてさ、青い顔してさ、ひそひそと何ごとか話してる…。お山からおりて来た銀が境内の前を通りがかり、その様子に首をかしげた。

「おい！ 皆の衆！ 何してる？」

「おお！ 銀け！」

村の奴らは銀を見ると手を上げた。

時々ふらりとやって来ては、何くれとなく手伝ってくれる気のいいガキを、村人達は好いてるようだ。「こっちさ来い」って手招きする。もちろん誰も銀が鬼っ子だなんてしらねえ。もし、知ったらこんなに仲良くしてくれまい。

「どうした？」

と駆け寄った銀に、村人達が口々に言う。

「笹葉のお山に鬼が出てな、莊助が食われたんじゃ」

「ええ？」

銀は仰天した。

「嘘だろう？」

「嘘じゃねえ。見たもんがいるだ。恐ろしい鬼がよ、莊助の首をくわえて笹葉山の上を飛んでいたそうじゃ」

「知らねえぞ、そんなの」

…童の歌う笹葉の鬼とはオレのことだろうが、莊助なんか食った覚えねえのに。と、銀は思う。

「おーい！」

遠くで野太い声がした。

「すおう様がおいでじゃぞ！」

その声を合図に、一部の奴らが一斉にお社の入り口まで走ってった。

『すおう様』ってなんだ？ って銀が首かしげると、後ろっから「銀」と呼ぶ声がする。振り返ると、年の頃14、5の娘がここにこしてこっち見てる。弥太のこの2番目の娘、佐和だ。

「佐和！」

銀は喜んで佐和に駆け寄った。銀は佐和が大好きだ。何しろ、綺麗だし、優しいし、銀の事実の弟みてえにかわいがってくれるし…。今まで出会った人間の中じゃ2番目に好きさ。

「銀。無事でよかった。銀は、確か、笹葉のお山に住んでるんだろう？ 鬼に食われちゃいねえかって、みんな心配してたんだよ」

佐和は鈴ころがしたみてえな声で喋る。

「へん！ 鬼なんてへっちらさ」

なんて銀はちよつと威張ってみせた。

「大丈夫なもんか。いいか、鬼に出会ったらすぐ逃げなきゃダメだよ」

「大丈夫だつてば。それより『すおう様』ってなんだ？」

「鬼退治の専門科だつて」

「鬼退治の？」

銀は眉をしかめた。銀にとってあんまり歓迎する相手ではない。

そこへ、わいわいと人に取り囲まれて、屈強な男が現れた。目深に編み笠をかぶり、色あせた黒のつむぎを着て、右手に錫杖、首には透き通った石の念珠をかけている。

村長が村の連中に紹介した。

「皆の衆、すおう様じゃ」

「よろしゅうに」

『すおう』は編み笠とつて皆に挨拶した。ぼうぼうの髪を後ろで一つにひっくくり、ギラギラ光る目でこっち見てる。そのたくまげな姿見て村人達は感激したようだ。

「おお、強そうな方じゃあ」

「これなら、きつと鬼を倒してくれるべ」

などと、ざわざわ、ざわざわくっちゃべる。

…なんじゃい！

銀は腹立てた。

…あんな奴呼びやがって！ 何が鬼退治の専門家だ！

銀は鬼だから、そんなこと思うが、村人達にとってみれば仕方のないことさ。鬼を殺さなきゃ、『オラ達』が食われるんだもの。けどガキの銀にはそんなことこの事情がいまいち理解しきれん。

それで、

「なにも殺す事ねえんじゃないかな？」

などとよけいな口をはさんじまった。

そしたら、村の奴ら一斉にこつち見た。どいつもこいつも「なんだと〜」ってな恐ろしい顔してる。銀はあせった。それで、しどろもどろ、

「世の中にはいい鬼だっているかもよ？」

などと、とってつけた事言う。一応、いい鬼つてのは自分の事なだけでな。なにしろ、銀は人を食った事も、食いたいと思った事もねえもの。でも、そんな事情知らねえ村の奴らはええ剣幕で怒り出した。

「何ほざく、このガキ！」

「いい鬼なんているけえ！」

「鬼なんかかばいやがって。まさか、おめえ、鬼の仲間じゃなかるうな？」

「な…仲間じゃねえやい！」

銀はぶんぶん首振った。

内心ヒヤヒヤする。せつかく今まで人間のふりしてうまくやってきたのに、こんなことで正体バレちゃ元も子もねえ。ほら、例の鬼退治の専門家がいやな目つきでこつち見てる。やべえぞ、ばれたのか？ 背中にいちゃあな汗が流れる。その時、見兼ねた佐和が助け舟を出してくれた。

「許してやれ。銀はただ優しいだけだよ」

さすが佐和じゃ。佐和だけはいつでもオイラの味方だ。って、銀

は佐和に笑顔を向けた。けど、佐和は村の奴らと同じような恐い顔して銀を見てた。そして、言った。

「けどな、銀。鬼なんぞに同情しても仕方ねえぞ。鬼は人を食らうんじゃ。恐ろしいんだぞ。鬼ってのはな、みんな殺しちまわねばならないもんなんだぞ！」

銀は無性に悲しくなった。けど、しょせん多勢に無勢さ。

「ああ、そうだよな。鬼は死ななきゃなんねえよな。変な事言つて悪かったよ」

つてやけくそで頷くと、こんりんざいこんな所に居たくねえとばかりに「オイラ。腹へったから帰らあ！」と大嘘ついてとつと走り出した。

後ろでじつとすおうがそれ見ていた…。

佐和の言つた通り、銀の家は笹葉の山のとつぺんにある。莊助襲つた鬼がひそんでるかもしれないが、銀の知つたこつちゃねえ。何しろ自分が鬼だもん。恐いわけねえさ。それに、もし、万が一襲いかかられたつて、銀には勝つ自信があつた。こつ見えて銀は強いんだ。ほんの3才のチビ助の頃から、どんな悪もんにも負けた事がない。これは本当の事だ。

けど、今日の銀はさつぱり元気ねえ。うねうね曲る山道をどんよりと歩いてく。いつもなら、輪つかとつて、小鬼に戻り、木の枝つたつてびゅんびゅん飛んでくにな、今日はどうにも鬼つ子に戻る気がしねえ。村の奴らの…いいや、佐和の言葉がきいたのかな？

とぼとぼと歩いてると、川のほとりに女が倒れてるのが見えた。市女笠かぶつて、黄色い上等の袷着て、どつかのやんごとない姫君みてえだ。ありや、こんなとこにやめずらしいなと銀はちよこちよこつて近寄つてつた。

「どつした？」

声かけると、姫君はうんうんうなりながら言つた。

「足をいためて難儀してます。手をかして下さいな」

「どれどれ？ ああ、こりやひでえ。はれてるじゃねえか。誰か呼

んで来る」

「それより、里まで背負って行って下さい。こんな山の中で供とはぐれてしまって、心細うて、心細うて……」

「うーん……」

銀は姫さん見つめて腕組みした。

……ここにはまだ荘助食った鬼が居るかもしれん。確かに、女一人置いてくのはぶっそうだよな。しかし、オイラが背負うにや少々姫さんでかすぎら。さあ、どうする？ …… などなど考え込んでたら後ろっからざわざわと人の声がしてきた。振り返ったらなんと例のすおうが村の奴ら引き連れて立っておる。

「なんだあ？ おめえら？」

銀が妙な顔してたずねると、すおうが威張りくさって言いやがった。

「そこまでだ、鬼め！ うまいこと人に化けたもんだな。けど、俺様は騙されんぞ」

なんてこった。やっぱり、オイラの正体嗅ぎ付けて追っかけて来やがったかと銀は青ざめた。逃げようかどうするか迷う。逃げるのは簡単だ。銀はすばしっこいもの。けど、ここで逃げたら、二度と佐和に会えなくなるかと思うと、どうも逃げる気がしねえ。『オイラ鬼なんか知らねえ』としらばっくれてやるうか？

一方すおうは、首にかけた宝珠を外し、それを額のとこまで持つてって一心になにか唱えはじめた。異国の言葉らしく、何言ってるのかちつとも聞き取れねえが、歌うような心地いい響きだった。そうしてるうちに、すおうの手の中の宝珠がぼおっと光り出した。それが、あんまり綺麗なもんで思わず銀は見とれてしまった。そいでじゅっと見てるうちにな、玉しか目に入らんようになって来た。その上、妙な事に、だんだんと額の輪っかが熱くなって来てな、あんまり熱いもんだから、村の奴らがすぐそこにいるってのに、銀は輪っかに手をかけて外そうとした。なんかもう、鬼だっればれたってかまやしねえ、なんとかなるさと思っただよな。

ところが、銀が輪っかを外すより先にな、恐ろしいうなり声が山中に轟いた。銀が我に返ると、目の前で例のやんごとなき姫君のたうちまわってる。悲鳴を上げて苦しむ姫君を見てるうちに、銀は輪っかが熱かった事なんて忘れてしまった。

姫君は地面の上でさんざんもがいたあげく、体中からしゅうしゅうと黒い煙りを上げて溶け出した。美しい皮膚は、ただれてしわくちゃになり。小さな黒い目は、ぎよろつとした赤目にかわり、つやつやした黒髪は白いざんばら髪になり、額には二本のどっかい角がにゅつと生えて来る。

すっかり正体を露にしまうと、鬼は、立ち上がりらんらんとした目でこつち見た。腰をすこし前にかがめ、腕はぶらんとさせてる。いまにも飛びかからんばかりの恐ろしい目つきに村人達が震え上がった。

「縛！」

って、すおうが手の平かざして叫んだ。手の平から、青白い光の縄が伸び、鬼の体をぐるぐる縛り付ける。苦しいのか、鬼はぎゃあって悲鳴を上げた。すおうは、宝珠を握りしめたまま一心に呪文を唱えはじめ。すおうが呪文を唱えれば唱えるだけ光の縄の呪縛がきつくなるらしい、鬼は転がって苦しみつづけた。内臓をやられたのか、口から血を吐き出してる。その目に涙が流れてる。…ああ、泣いてら…って、銀の胸がキリキリ痛んだ。苦しんでる鬼の顔が、自分の顔に見えて来たんだ。

それで、とうとう銀はやっちゃいけない事をやっちゃまった。

「もう、やめろ、やめてくれ」

って、すおうに飛びついたんだ。それが、勢いよかったもんだから、すおうは驚いて思わず宝珠を手から放しちまった。鬼を縛り付けてた光の縄が消えて行く。

すおうは慌てて宝珠を拾おうとしたが、その前に銀が奪ってしまつた。

「おい！ このガキ！ 何するんだ？」

すおうが手を伸ばし、取り戻そうとする。しかし、銀は念珠を懐に隠して逃げ回った。

「返せ！」

ってすおうが銀を捕まえようとしてたら、鬼がよろよろ立ち上がってこっち見た。

「ああ！」

って村の奴らは青ざめた。

…食われる

って、誰もが思ったんじや。

けど、幸いな事に、鬼は逃げる事しか考えてなかったらしい。村の奴らとは正反対の方向に跳躍すると、木々を伝って山奥へ消えて行ってしまった。

笹葉の小鬼03

銀のせいで鬼とり逃がしちまったってうわさは、あつという間に村中にひろまった。村の奴らはかんかに怒った。無理もねえさ。おかげでまたみんなびくびくした日を過ごさなきゃなんねえんだもんな。

なんにも知らねえ銀は、次の日のんきに山から降りて来てな、

「おう、子守りの用はいらんか？ 刈り入れ手伝わなくていいか？」
っていつものごとく村中駆け回った。もちろん、誰も答えちゃくねえ。それどころか「あっち行け、くそガキ」ってけんもほろろにおっぱられる。

「けっ、なんでえ…感じ悪いな」

などと悪態ついて土手つ原歩いてたら、小川で洗濯してる佐和の姿が見えた。ああ、佐和だ。ちよつとグチでも聞いてもらおうと、銀はひよいひよい土手を降りてった。そいで、ざぶざぶ小袖を洗う佐和の背中に無邪気に話しかけた。

「よう、佐和。聞いてくれよ！ 村の奴ら、話しかけてもろくすっぽ答えちゃくれなんだ。なんだってんだ？ 感じ悪い！」
すると、佐和がこつちも見ずに返事する。

「ああそう。でも、あんただって悪いんじゃないか？」

「ありゃ？ なんか様子が変だ？ 他の奴らと変わらねえ感じの悪さじゃねえか？ 銀はちよつとあせつて

「なんでさ？」
とたずねた。

「自分の心に聞いてみな」

「さっぱり分かんねえよ！ オイラ、何も悪い事してねえもん」

「あ、そう。じゃあ、知んねえ！」

佐和は、そっけなく言うど洗濯物をカゴに入れてぷいっと立ち上がった。で、とつと歩き出す。銀は、慌てて後を追っかけた。

「おい、佐和！ 佐和よう！」

けど佐和は知らんぷりだ。

「何怒ってるんだよ？ なんで喋ってくんねえんだよ？」
すると、佐和はやつとこっち向いて答えてくれた。

「鬼の味方するよなガキとは口きいてやんねえ！」
ってな。

それ聞いて銀はうつむいてしまう。その間に、佐和はちゃっちやと行ってしまふ。なんだか追っかける気も失せて、しばらく銀はそこぼさつとしてた。

…仕方ねえだろう？ オイラも鬼なんだもん。

って、内心思っていたが、いつまでもそうしてても仕方ねえし、とぼとぼ歩き出した。

しばらくうつむいて歩いてたら、背中をばしんと叩かれた。

「なんだよ」

って後ろ見ると、すおうがずだ袋持って立ってる。

「よお！」

すおうは、村の奴らとは正反対ににこにこ笑ってこっちを見てた。けど、その笑顔見てたら、なんだか腹が立って来た。…オレがこないやな思っているのはみんなお前のせいだっと思ってたのさ。要するに八つ当たりさ。

「なんじゃ？ お前か」

つつけんどんに答える。しかし、すおうには通じねえ。

「ああ、俺さ」

相変わらずニコニコ笑ってる。

「何の用だ？」

「ああ、じつはな」

って、すおうは銀の後ろをちよこちよこくつついて来る。

「お前、笹葉山に住んでるそうだな？」

「それがどうした」

「よう、あんな物騒なところにガキ一人で住むな」

「一人じゃねえよ。姉ちゃん二人暮しさ」

「へえ？ 姉さんがいるのか？」

「血はつながつてねえけどな」

「美人か？」

「どうでも、いいだろう？ そんな事は」

「そりゃそうだ……」

そこで話は途切れた。けど、やっぱりすおうは後をくつついて来る。いいかげん邪魔くさくなって、銀は振り返りたずねた。

「おい、一体、どこまでついて来んだ？」

すると、すおうは妙に照れくさそうな顔して、ぼりぼり頭かいて、にかつと笑ってこう答えた。

「実は、昨日鬼を取り逃がしちまったせいで、世話になった村長さんとこ追い出されてちまってさ……」

「それで？」

「おめえんとこ、とめてくれねえか？」

「……」

呆れ返る。しかし、はつきりと虫の好かねえ男だが、村長に追い出された責任は自分にもあるしって事で、仕方ねえなと銀はすおうをつれて笹葉山に向かった。

それから一刻ばかり山道を歩いてくと、どっかから女の歌声が聞こえて来た。そりゃ、天女の歌声かつちゅうくらい綺麗な声でな、どこから聞こえるのかとすおうがきよときよとしてたら、銀が「あれがオイラの小屋さ」と前方を指さした。

気がつけばあれほど生い茂っていた木が一本もなくなって、目の前には草ぼうぼうの荒地が広がってる。荒地地のまん中には、でっかい杉の木が生えてて、その横に今にも傾きそうなぼろい小屋が建ってた。おそらく、昔、獵師が使ってた山小屋かなんかだろう。

それが、今は銀の住処ってわけさ。

そいでな、そのボロ小屋の前に真っ白い麻の着物きた女が腰かけて、ぼんやりと歌をうたっていた。…そう。それが、不思議な歌声

の正体だ。

つうきのひいかり やあさしくう

みいずうみ てらしてた

たあびだつ あなたあのことお…

どう見ても30にはなっているの女だ。けど、童女みたいな声をしている。それに、なんて澄んだ声だ…。

すおうは、目の前で歌う女の横顔を見つめた。ぼんやりとした瞳が何やらこの世のものならぬ光を帯びておる。まことに天女ではないかと見とれておると、銀が手エ振って叫んだ。

「おーい。マルター！」

…マルタ？ なんちゆう妙な名前だ？ と、すおうは思った。とても、あの美しい女にふさわしい名前ではない。

銀に呼ばれて女は嬉しそうにこっち向いた。けど、正面向いたマルタの顔見てすおうはぎょっとした。なぜなら、その右頬に無惨なやけどの跡があつたからだ。

「あれが姉ちゃんさ。美人だろ？」

銀が自慢げに紹介した。

「あ…ああ」

すおうは頷いた。確かに美人だ。けどなあ…と、右頬のやけどの跡から目がはなせねえ。

一方、銀はすおうの答えに満足した。もし、こいつがマルタの傷の事でつまらん事ぬかしたら、問答無用で追い帰してやろうと思つてたからだ。虫の好かん奴だが、心根は悪くねえと見てとると、銀はマルタにもすおうを紹介してやった。

「マルタ、お客さんだ。嬉しかる？ すおうつちゅうて鬼退治の専門家らしい」

「どうぞ、よろしゅうに」

すおうは頭下げた。ところが、マルタは返事もせずにはらけら笑つた。

「？」

すおうは首をかしげる。こりゃ、いい年こいた大人の反応じゃねえぞ。本当に童女みてえだ。いや、童女うちゆうかなあ、これはなあ…。

つて、目の前の女の顔をまじまじと見てたら、

「悪いな、マルタは何もわかんねえんだ」

と、銀が頭の上で手の平をパーツとやった。

…気が触れてるのか…

すおうは納得した。なに、こんな悲惨な世の中にゃあ、とりわけめずらしい話でもない。けど、哀れなもんだよなあ。さぞかしひでえ目にあつたんだろうなあ……。にこにこ無邪気な笑顔浮かべる女の横顔を見て、すおうはいたましく思った。

やがて日もとっぷりと暮れてきて、3人は小屋の中で粗末な夕飯を食う。

マルタは銀にべったりくっついて母親みたいにあれこれ世話やく。不思議なんだけど、マルタは銀の事小若って呼んでいた。

「小若、汁こぼしてるよ」

「小若、ちゃんと冷ましてお食べ」

つてな具合さ。

「小若つてのは、マルタの死んだ子供の名前でな…」

と銀が説明した。その子は、マルタの故郷の村に兵士が攻め込んで来た時に、マルタの目の前で殺されちゃったらしい。その時は、村の人間全員殺されてさ、たまたま通りかかった銀がマルタだけ辛うじて助け出したんだが、それ以来ちよつとおかしくなっちゃったんだつて。まともな頃はきつい女だったけど、こうなると哀れなもんだよな…なんて、銀は大人びた目をする。そんな銀をまたマルタが世話したりして、奇妙な姉弟をすおうはただ見つめるばかりだった。

腹がふくれると、銀は昨日からずっと気になってる事を聞いた。

「それにしても、昨日のあの鬼は、どこ行ったのかな？」

すおうは「うん」と頷き答えた。

「少なくとも、この山にはいないようだ。気配を感じねえ」

「じゃあ、まだ里の近くにはいるのか」

「いるさ。きつと、近いうちに人を食いに出てくるぞ」

「怪我してるのにか」

そういつて、銀は口から血を吐き涙流してた鬼の顔を思い出した。

「怪我してるからこそさ。鬼はな、人を食えばあらゆる意味で強くなるんじや。回復力も妖力も上がる。つまり、人を食えばあの程度の傷なんてすぐ直るって事だ。だから、奴は回復のためにきつと村の奴らを食おうとするはずだ」

「だったら、お前は村にいらなくても大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。俺が奴を退治するまでは、鬼封じの札を家に貼って決して夜は家から出んようにと村の奴らに言っておいたもの」

「鬼封じの札？」

「名前の通りさ。鬼を寄せつけないための術をかけた札さ」

「そんなもんあるのか？」

「ああ、あるさ。お前にもやろうか？」

つて、すおうは持って来たズダ袋のなかから赤色のお札を一枚出した。短冊みたいな紙切れの上に、お釈迦さんの絵が書いてあり、その周りに難しい字がたくさん書かれている。

「ほれ」

と差出されたお札を銀はひょいっと受け取った。瞬間、ぱりぱりつて妙な痛みが走ったけど、すぐに直ったから気にもしなかった。

「家の入り口に貼っておけば鬼は近付けねえ。姉さんも安全に暮らせるってわけさ」

すおうが言う。

「そりゃ、ありがてえな」

つて銀は喜んだ。自分とはもかく、マルタの事は心配だからな。

「そうだろう？ 貸してみる、俺が貼ってやるから」

すおうは銀からお札を受け取ると、持参したズダ袋からのりを取り出し、戸の上にお札をぺたって貼ってやった。で、貼りながらな、

銀に説教はじめた。

「お前、二度と鬼退治の邪魔するんじゃないぞ。お前は妙に鬼をかばうけど、お前の優しさが通じるほど鬼は甘くねえんだぞ」

昨日の事言ってるんだろう。けど、銀は知らん顔した。それは保証できねえもん。

銀の態度にすおうが長えたため息をつく。それで、くるりとこつち向いて言った。

「あんな、鬼つてのは、元から鬼なわけじゃないんだ。悲しみや怒りがきつかけで狂っちゃまったのが鬼だ。一旦狂っちゃったら、本人の意志ではどうにもならねえ。本人にとつちや、もう善悪の問題じゃないんだ。狂いの血の暴走を食い止めるには、あいつら殺してやるしかねえんだ」

「そうかよ……」

銀はそっけなく答えた。

正直、すおうの話は難しく全部の意味は分からねえ。けど、一つだけはっきりしてる。自分が鬼とばれたら間違いなく殺されるってことだ。

「そろそろ寝るか」

銀は土間に丸めてあったムシロを持って来て、すおうのための寝床を作ってやった。で、自分とマルタは隣の部屋にムシロひいて、そこへゴロンと横になる。今日は疲れた。とつと寝ちまおうって、銀は無理やり目を閉じた。いつも寝る時は外す金の輪っかも今日がかぶりっぱなしだ。もちろん正体隠すためさ。

けど、本当は、すおうは全部気付いてた。いくらうまく化けたって、すおうは専門家だもの。銀の正体ぐらいお見通しさ。

…しかもだ、銀は並みの鬼っ子じゃねえ…

って、すおうは思ってた。

…それが証拠に、お札触ってもケロツとしてたじゃねえか。自分で言うのもなんだが、あれは大した札なんだ。並の鬼が触った日にゃ、力を奪われ動けなくなっちゃう。なのに銀はけろつとしてやが

った。このまま放つといたら、あいつは世にも恐ろしい力を持った鬼になるだろう。ガキのうちに殺してしまわねばならん。かわいそうだが仕方ねえ。それが、俺の仕事だから。けど、せめて、苦しまないよう、眠ってるうちに殺してやるう…。

すおうはそう思い定めると、目だけ閉じてじっと時を待った。

やがて、しんしんと夜がふけてく。聞こえるのは木のざわめきばかり、月も星も息こらしてる。

…そろそろ眠った頃だろう。

って、すおうは立ち上がると、用心深く隣の部屋に向かった。光の宝珠を握りしめ、足音を忍ばせ、手を伸ばし少しだけ戸を開ける。すると、囁くような歌声が聞こえてきた。マルタの声だ。

…ねんねんころろ ねんころろ

ぼうやのととさま どこいった

マルタは頬杖ついて歌ってた。隣では銀が安らかに寝息たててる。その背中叩いてやりながら、マルタは幸せそうに歌ってた。

山を越えて また越えて

みつつ よつつ 川越えて…

すおうはしばらくじっとそれを眺めていたが、やがて、首を振り、戸を閉めると自分の寢床に戻って行った。

「姉ちゃんは山じゃねえのか？」

「鬼が恐いから山から降りて来たんだよ。村にいれば大丈夫かと思つてさ。けど、姉ちゃんは体が強くねえから、すぐそこで具合が悪くて動けなくなつちまった。頼むよ、助けてくれ。佐和の他に頼めるもんがいねえんだよ」

そう言つて銀はわんわん泣いた。

確かに、今の銀は村中の人間にそつぽ向かれてるから、誰も助けしてくれんじやろう。それで、けつこつ夜もふけてたけども、1人じやねえし、昼間の事で罪悪感もあつたし「いいよ」つて答えて、佐和はついつい家から出てしまった。

…けど、あの子は一体どこまで行くつていうんだらう？

佐和は目の前行くガキの背中見つめて首をかしげた。行けども行けども銀の姉さんらしき姿なんか見えねえじゃねえか。それに、あんまりにも村から離れすぎちゃ危ねえぞ。

「なあ、銀、どこまで行くんだ？ 姉ちゃんはどこにいるんだ？」呼びかけても、呼びかけても、銀は振り返りもしねえ。黒髪ばかり揺れて、どんな表情してるのかちつとも分からねえ。それに、妙に歩くのが早い。佐和は小走りで追つかけるのがやつとだ。あの子はこんなに歩くのが速かつたっけ？

…本当について来て良かったのか？

なんとなく不安になる。なんだか、あのガキは佐和の知ってる銀じゃねえみてえだ。けど、佐和は首をふつて思い直した。

…いや、疑つちやいけねえ。昼間あんなひでえ事言つたあげくにおかしな疑いかけちゃ、あまりにも銀がかわいそうだ。

黙々と歩いてくうちに、お社の裏のお池が見えて来た。それで、佐和は何となくホツとする。

…ほれみる、ここは銀がいつも昼寝してるお池のひとりじゃねえか。ここに姉ちゃんを隠してたんだな。

けど、池のほとりに着いても誰もいねえ。

「姉ちゃんは、どこさ？」

って佐和がたずねたが、銀は相変わらず向こう向いたきりさ。

その時、佐和は「あれ？」って奇妙な事に気がついた。

「なあ、銀。お前、いつも頭につけてる輪っかはどうした？ あれ、母さんの形見のお守りだって大事にしてたんじゃなかったか」

すると、銀は「ああ、あれは、もういらねえんだ」って答えた。

それからおかしそうに、くすくす笑った。

「何がおかしい？」

佐和は首をかしげた。本当に変だ。さっきまで泣いてたくせにさ。すると、銀は向こう向いたまま答えた。

「おかしいんじゃない、嬉しくて笑ってるんだ」

「嬉しい？ 何が？」

「お前がここまで着いて来てくれたことがさ」

そう言うと、銀はゆっくり振り向いた。

赤い目がキラキラと光ってる。

それは、佐和のよく知ってるあの銀じゃなかった。

笹葉の小鬼05

「うわ！」

って叫んで銀は飛び起きた。

よく覚えてねえが、何だかとてもいやな夢を見た。全身びっしょりと汗かいてる。

ムシロの上に、柔らかな日が差し込んでる。もう朝だ…。マルタはまだ眠ってる。その顔見ると銀はホツとして、汗を拭った。

朝飯を食い終わると、銀はすおうの後にくっついて村へ降りて行った。

昨日の村の奴らの態度を思い出すと、正直、村に行く事にはあんまり気乗りがしねえ。それでも村に向かうのは、佐和の事が気になつてたからだ。なにしろ、昨日、あんな気まずい別れ方しちまつたもの。他の奴らはともかく、佐和とだけは仲直りしたかった。なあに、きつと、佐和なら分かってくれるさ。今日はいつものように「銀」って笑いかけてくれるさって、銀は信じてる。やがて、山道が終わり、金色の稲穂の波の向こうに集落が見えて来た。笹葉の里だ。ところが…。

村は異様な静けさに包まれてた。

いつもなら、村の奴らが刈り入れたり脱穀したりと忙しく働いてるころなのに、誰の姿も見えやしねえ。散らばったザルやらカゴやらの間を、鶏がのどかに歩き回ってるのが見えるばかりさ。銀もすおうも首をかしげた。…なんで誰もいねんだ？

藁葺きの家々を覗き込んでみても、やっぱり誰もいねえ。妙だ。

…なんか、悪い事でもおきたんじゃないか？

って、二人は顔見合わせた。

そのまんま、低い軒々の間を歩いてくとな、くれは山のふもとのお社が見えて来る。そこでようやく二人は人の姿を見た。そりゃ、おやしるの入り口の鳥居の脇の大岩に腰かけて念仏を唱えてる、よ

ぼよぼの婆じゃった。

「お絹婆！」

銀が駆け寄ると、婆はぶるぶる震えながらこつちを見た。

「おい、どうした？ 何を震えてる？ 村の奴らは？」

「お池のほとりじゃ」

と、婆は答えた。そして、またぶつぶつ念仏を唱え出す。

「なんまんだぶ、なんまんだぶ。ああ、哀れな事じゃ。佐和よ、なんで一人でお池のほとりに行ったんじゃあ？」

「なんじゃと？」

佐和の名を出され、銀はびつくりした。

「今、なんと言った？ 佐和がどうしたって？」

すると、婆は耳を疑うような事を言った。

「おお、銀。お前は知らんのか？ 佐和が食われたんじゃぞ、夕べ、お池のほとりで、鬼に食われたんじゃぞ」

目の前が真つ暗になる。

ばくんばくん心臓が音たてる。

…嘘じゃ、なんかの聞き間違いじゃ！

銀は心の中で叫んだ。

「そら、本当か」

すおうが真つ青になって婆にたずねた。そしたら、婆は頷いた。

「本当さ。社の裏のお池に行ってみりゃ分かる。村の奴らみんな集まってる」

銀は無我夢中で、お池に向かって走り出してた。

婆の言う通り、お池の周りには村中の奴らが集まってた。

いっつもは鏡みてえな綺麗な水面が、今日は真つ赤に染まってる。そのまん中に佐和が：正確には佐和の首が浮かんでさ、周りに桜の花びらてえな薄桃色の端切れがいくつも浮かんでる。佐和の着てた着物の切れはしさ。

ああ、そこは銀が日頃気に入ってた場所じゃないか。

いっつも銀が昼寝ん時に昇ってる松の木の真ん前で、佐和の母親が

半狂乱で泣いてる。それを佐和の兄やら姉やらが支えてる。それを見てみんなすすべもなく立ち尽くしてて。

そこへ、すおうと銀が駆け込んできた。二人はこの光景を見ると、他の奴ら同様呆然とした。

「なんでじゃ？」

すおうが怒声をあげる。

「夜、外に出るなど、あれほどきつく言っておいたのに」

「誰かが呼びに来たようだ」

佐和の姉のよりが答えた。

「あの時は、半分寝てたからよく覚えてねえが、確かに子供が佐和を呼びに来ていた。あれは、銀、お前じゃなかったのか？」

「違う」

銀は驚いて首を振った。

「オイラは、夕べはずっとすおうと居たもの」

「その通りじゃ。銀は、ずっと俺と一緒に居た」

すおう頷いた。

「他に心当たりのある奴いるか？」

「すおうが訪ねるとみんな一斉に首をふる。村人全員、すおうの言い付けを守って家の中にじっとしてたんだって。」

「鬼が出るんじゃないかと思うと、とてもじゃねえ、恐くて外になんか出られませんです」

「って言葉にすおうは「なるほど」って頷き、

「それなら、鬼が人に化けて来たのかもしれない」

「って、苦々しい顔した。」

そんなやりとり聞きながら、銀の心はなぜかすつきりしねえ。…確かに夕べ佐和を呼びに行ったのはオイラじゃねえ。けど、佐和が死んだのはオイラのせいじゃねえのか？ …銀の心の中にいやな気持ち黒雲みてえにわき上がって来る。

その時、まるで銀の心に答えるみてえに悪ガキが叫んだ。

「けど、佐和が死んだのは銀のせいじゃ！」

別の子供も調子に乗って叫んだ。

「そうだそうだ！ 銀のせいじゃ」

「アホ抜かせ！ なんて銀のせいじゃ」

って、すおうが恐い顔すると、

「だって、元はといえば銀が鬼をかばったからじゃねえか！」

って、ガキどもがわいわい騒ぐ。

そしたら、大人までが騒ぎはじめた。

「そうじゃ、銀が鬼をかばわなきゃ、佐和は食われたりしなかった」

「銀のせいじゃ！」

「銀のせいじゃ！」

波紋みたいに広がって怒号の渦の中で、銀はなにやら白昼夢見てるみたいな妙な気分になってきた。ああ、現実感がねえ。これはそうさ、今朝見た恐ろしい夢の続きにちげえねえ。けど、なんだ？

この耳鳴りは。ガンガンガン響いて来らあ。それに、妙に額が熱い。輪っかが締め付けるみたいだ。痛くてたまらねえ。苦しいよ。ええい、こんなもん、いつそとっちまおうか…？ 暗示にかけられたみてえに、銀が輪っかに手をかけた時さ、

「黙れ」

って、すおうがものすごい剣幕で怒鳴った。それで銀はハツと我に返って、オレ何しようとしてたんだって、輪にかけてた自分の手を見る。

一方すおうは怒りのあまり身を震わせてた。そしてな、もう一度怒鳴った。

「鬼は必ず俺が退治するから黙れ」

ってな。それで村の奴ら全員黙りこくっちまった。

その夜から、いつ鬼が現れてもいいようにって、すおうは毎夜寝ずの番を始めた。昼間は昼間で鬼の姿探す。けど、敵もさるもので、すおうが見張りを始めたとたんぱったりと姿を現さなくなった。気配すら感じさせねえ。「もう、いなくなっただんでねえか？」って思いたがる者もあったが、とんでもねえ、まだ鬼はこの辺りにひそん

でやがるさ。その証拠に、山の獣達の無惨な死体が里の近くに落ちてるでねえか…。

一方、銀はいえば、それ以来村に行くのをやめちまった。

…村の奴らの怒りはもつともだもの。オイラがあの時鬼をかばったりしなれば、佐和は食われたりしなかつたもん。

それ考えると、申し訳なくて、辛くて、銀はべそべそ泣いた。マルタがえれえ心配したようだが、銀はべそべそ泣き続けた。けど、10日ほども泣いてたら、やっと気がしずまってきた。銀は考えた。…オイラ、もう笹葉にはいらねえけども、せめて佐和のかたきをつつてからここを去ろう…ってな。

そう決めると、銀の行動は速かった。

その日の夕暮れ、マルタに「誰が来ても戸を開けるな」と何度も念を押して（分かってくれたかどうかはあやしいが）、びゅんびゅんと山の木を伝って村に降りてった。

村の入り口には篝火があかあかと燃えていた。その横で、すおうが腕組みして、あぐらかいてこつちをにらんでる。村の奴らの姿は見えねえ。家に隠れてるんだろう。けど銀にとつちや好都合さ。

「おーうい！ すおーう！」

銀は遠くからすおうに向かって呼びかけた。

すおうはびつくりして走って来る銀を見た。で、駆け寄ってきたとこを叱りつける。

「なんだ？ おめえは！ 危ねえじゃねえか、こんな時間にうるついたりして」

「大丈夫さ、おいらは」

「おめえはともかく、姉さんが危なかるう。あんな所に1人きりにして」

「それも大丈夫だ。お前のお札があるじゃねえか。それより、オイラにも鬼退治手伝わせてくれ」

「ダメじゃ。山に帰れ！」

「なんでじゃ？」

「危険だからじゃ」

「大丈夫だつていうのに…！」

銀は食い下がった。けど、すおうは鉄の壁のごとく頑に拒否する。なぜかって、マルタをあんなどきに、長々と一人にしておくのは危険すぎる。お札があるといったつて、鬼は人に化けるんじやもの。佐和の件がいい例じゃねか？ それだけじゃねえ。幼い銀を、これ以上鬼なんぞと関わらせたくない。

「ええから、とつと山へ帰れ！ そいで、できればどつか遠くに行け。鬼の出ねえ安全で平和な土地を探してな、何もかも忘れて幸せに過ごすんじや。鬼の事も佐和の事もさっぱり忘れてな」 「ああ、そうするつもりさ」

銀は頷いた。

「けど、ここまんまじゃオイラどこ行つたつて幸せになれそうもねえ。だつて、オイラが佐和を殺したようなもんだもの。一生それを後悔して生きていくに違いねえ」

「佐和が死んだのは、お前のせいじゃねえよ。佐和だつてそれくらい分かつてくれているさ」

「いいや。あん時の村の奴らの言葉を聞いただろ？ 佐和だつてきつとオイラの事恨んでるに違いねえ。オレができる償いは、鬼を殺して佐和の仇を討つ事だけだ。頼む、鬼退治を手伝わせてくれよ」

あんまし銀が必死で頼むから、すおうは少し哀れになってきた。けど、だからつて鬼退治には絶対に付き合わせたくねえ。で、どうするかと考え、すぐに妙案を思いつく。

「そいじゃあさ、ために佐和に聞いてみるか？ お前を恨んでる

かどうかってよ？」

銀は仰天した。

「そんなことができるのか？」

「ああ、できるさ。なんなら今すぐ聞いてやるつか？」

すおうはそう言う例のずだ袋から2本のろうそくと香炉と木の台を取り出し「ついて来い」って歩き出した。

すおうの後ろをくつついて銀が辿り着いたのは、例の池のほとりさ。月明かりが水面を照らして、ふわふわと端切れが漂ってるのが見える。

すおうは、草の上に腰を降ろすと、台を置き、ろうそくに火をともした。あたりがぼうつと明るくなり、いまだに消えない血の跡があらわになる。銀はそれからから目をそらした。

ろうそくには不思議な文字が浮かび上がり、炎とともに揺らめいていた。それがなんと書いてあるかは銀には読めねえ。

次にすおうは香炉を焚いた。それを2本のろうそくの間置く。白い煙りが真直ぐに立ち、辺りにえも言われぬ芳香がたちこめた。

そしてすおうは2つのろうそくの光と光の間の一点を見つめて、手の平で印を結び、低い声で唱えはじめた。

「闇より出てたまえ、さまよえる魂よ。我、汝の苦しみを解かん」
そしてさらに呪文みたいな言葉をつぶやく。

銀はすおうのやる事を熱心に眺めてた。そしてその顔つきは、やがて驚愕の色にかわった。

「なんでかって？」

そりゃ、もうもうとたちこめる香炉の煙りの中に、悲しげな佐和の姿がうつすらと浮かび上がったからさ。

銀は呆然として煙りの中で揺らめく佐和の姿を見つめた。佐和は虚ろな瞳で空を見ておる。

「さ……わ？」

銀は掠れた声でその名を呼んだ。そしてすおうに尋ねた。

「生き返らせたのか？」

「違う」

すおうは首を振った。

「魂を呼び寄せただけだ」

「お前は霊媒師なのか？」

「似たような事はできるが、ちょっと違う。誰の魂でも呼び出せるわけじゃねえが、死んだばかりの魂なら呼び出せるんだ。そら、声

かけてみる。話、できるぞ」

銀はもう一度佐和を見た。佐和の姿は煙りの中でゆらゆら揺れている。

「佐和、佐和。オイラが分かるかい？」

「ギ……ン？」

佐和がか細い声で答えた。

「そつだ。銀だ」

佐和が答えてくれたのが嬉しくて、銀はほろほろと涙をこぼした。佐和、ごめんな。オイラのせいで。オイラが鬼をかばわなきゃ、佐和は死なずにすんだのに」

「イイ……ンダ。コレ……モ宿命」

佐和の声は、今にも消えそうにはつきりしねえ。銀はひとことも聞き漏らすまいと耳をすませた。

「ソレ……ヨリ……アノ日……ヒドイ……事言ッテ……ゴメンナ」

「ひどい事つてなんだ？」

「クチヲキイテ、ヤンネエ……ッテ」

「そんな、そんな事……」

佐和の言葉に銀の目から溢れてる涙が止まらなくなる。

「本気にしちゃいなかったよ。気にするなよ」

それだけ言うと、銀はわんわんと泣いた。悲しくて、悲しくてわんわんと泣いた。すおうが泣きじゃくる銀の肩を軽く叩いた。

「だから、言つたる？ 佐和は恨んじやいねえって」

「ああ」

「これで気がすんだか？」

「ああ、すんだよ」

「そいじゃあ、山に帰れ。何もかも忘れて、よその土地に行け。佐和もそれを望んでるさ」

すおうの言葉に、銀は佐和の顔を見た。佐和は透き通った体できりに頷いてる。すおうの言う通りにしろって事だろう。

「分かった」

って、銀は涙をふいた。それ見て安堵したすおうは、煙りの中で揺れてる佐和に向かつて言った。

「佐和、助けてやれなくて、すまなんだなあ。さぞ無念じゃろうが、これでお別れじゃ。少しでも早う成仏してくんな」

ところが、佐和は首をふった。

「…待ッテクダサイ」

「なんでじゃ？」

「鬼ガ…動イテイル」

「なんじゃと？ 俺がどんなに探してもとらえられねえ鬼の気配が分かるのか？」

「ハイ…」

「そうか、佐和はもうこの世のものではないから、感覚がわしらより研ぎすまされてるのだろう…」

ってすおうは納得した。

「ソノ通り…デス。サア…早く。鬼八、恐ロシイ速サデ、動イテイル…！」

そう言つと、佐和は火の玉に姿かえ、木々の間をすーっと飛んでった。

そら、中天に刃みてえな月がかかっている。ひっそり寝静まった家々の間を、ふわふわと火の玉が飛んで行く。それを追って、すおうと銀が風みてえに走ってった。

走りながらすおうが言った。

「銀！ お前は帰れ。気が済んだらう？」

すると、銀は首をふった。

「けど、こっちが帰る方向だし、ついでだ」

「なるほど」

ってすおうは納得する。

…確かに、こっちは笹葉山の方向さ。けど、それだけじゃねえ。

銀は、せっかく会えた佐和とまだ別れたくなくて、火の玉の後を追っかけてるんだ。

やがて火の玉は、村の外に出た。そして、真直ぐにどんどん走ってく。川越え、お地蔵さんの前を過ぎ、どんどん、どんどん走ってく。

そのうちに…あれ？ って二人は思った。だって、この先は笹葉山へと続く一本道だ。他に曲るところなんてねえぞ。

ってことは…！

すおうが真っ青になって叫んだ。

「マルタが危ない！」

笹葉の小鬼06

笹葉山の小屋の中でマルタがぼんやり歌ってた。

つうきの ひいかり やあさしくう…

みいずうみ てらしいてた

窓から月の光が射し込んで、囲炉裏の端を金色に染めている。

マルタは壁にもたれて昼間ひろった棒切れに赤いベベ着せて、それを赤んぼみたいにだっこして歌ってた。

たあびだつう あなたあのこと

なあにもいいえず…

いつもなら、とうに夕餉の時刻じゃ。でも今日はまだ『小若』が帰らんからこうして待っている。

…何してるんじやろ？

マルタは思った。

不思議な事にな、他の事はみんなぼんやりしてるのに、『小若』の事だけははっきり分かる。誰の言葉も通じんのに、小若の言葉だけは分かる。今日は、小若が出かける時に『オイラが戻るまで、決して外に出るな』って言うてたから、マルタはずっと小屋の中に居た。

…それにしても、小若、遅いなあ。どこぞで遊んでいるんじやろ
うか？

って、マルタは窓越しに外を見た。

隣の山の上で金色のお月さんが光ってる。

さわさわと、風が木の葉を揺らしてる。

その景色があんまり綺麗だから、マルタはいつまでも窓越しに外を見てた。

そしたらな、木々のざわめきに混じり、誰かが草を踏む音が聞こえて来たんじや。

ざくつざくつ…

…誰じゃろう？ などと考えもせず、マルタはじーつと外を見ている。

ぞくつぞくつ…

足音は、小屋の前でぴたつと止まる。

とんとん

誰かが戸を叩いた。その音にマルタが反応する。

とんとん…

「開けてくれ」

子供の声がある。マルタは首をかしげた。誰じゃ？ 聞き覚えある。けど、いつも聞きなれた『あの子』の声じゃねえ。

とんとん…

声の主は再び戸を叩いた。

「開けてくれ、おっ母。おれじゃ、小若じゃ」

…小若じゃって？

マルタは立ち上がり、ふらふらと歩いてった。

そいで、からりと戸を開けた。そこに、くりくりした目の男の子が立っておる。

…ありゃ？ こりゃ『あの子』じゃねえぞ。一体誰じゃ？ けど、見覚えあるなあ。懐かしいなあ…。

「そつだろつ？ 懐かしいだろつ？ だったら外に出て来ておくれよ」

男の子は、マルタの心が聞こえるみてえに笑う。

…けど、『あの子』が外に出るなと言ってたもの。この小屋はお札に守られてるから安全だって言ったもの。

「何言ってるんだ？ 外は全然恐くねえぞ。遊ぼうよ、おっ母」
そう言つと、男の子はくりつて向こう向いてばたばたと走つてた。

そいでな、杉の幹に手をかけておいでおいでって手招きする。
…なんで、おっ母って呼ぶんだ。お前はあたしの知ってる『あの子』じゃねえよ。でも、あたしはお前を知ってる。誰だろつ？ とつても大切な、大切な…。

そのころ銀は、すおうと一緒に佐和の火の玉追っかけ山道を走ってた。

…あと少しじゃ、あと少しじゃ。
て、心ん中で唱えてた。

…マルタ、外に出るなよ。ぜってえに、ぜってえに外に出るなよ
…って

「おっ母、早うこっち来いよ」

杉の根元で男の子が手招きする。

霧がかかったみてえな頭ん中で、マルタは必死に何か思い出そうとしてた。

…あれは、誰？ あれは、誰？

なぜか涙がこぼれ落ちて来る。

「おっ母ってば」

男の子はにこにこ笑った。

マルタは小屋から一歩踏み出した。

走って、走って、走るうちに、視界をさえぎる木々がだんだんまばらになって来る。そうして、ようやく見なれた杉の木のとっぺんが現れて、そいでもってすおうと銀はついに小屋の前に辿り着いた。火の玉はそこでぐるぐる輪を描き、再びゆらゆらと佐和の姿に戻った。

「ここか？」

…すおうが尋ねると、佐和はこくりと頷く。

…ああ、やつぱし

…すおうは思った。

…鬼はマルタを狙ってたか。

それにしても、マルタは無事なのか？ 銀は飛ぶように走り出した。

マルタは涙流しながら男の子の目の前に立ってた。

男の子はくりくりした目で無邪気にマルタを見上げてる。

「会いたかったよ、おっ母」

男の子も目をうるます。

マルタは子供を抱き締めた。

遠い昔、マルタの心がこなごなに壊れちまう前に、夕暮れの道でいつもそうしてたみたいに小若を抱き締めた。

けど、その腕ん中で、子供はぎよろつと目を光らせる。くりくりした黒い目が、今は真っ赤に染まってる。

「やっと、術にかかったか。手こずらせやがって」

子供はしわがれた声で言った。

その口は耳まで裂け、いつの間にか額からは二本の角が生えてい
る…。

「すごい妖気だ！ 鬼はすぐそこに居るぞ！」

すおうが叫んだ。それで、すおうの後を追い、銀と佐和は小屋の表にまわって行った。

「マルタ！」

銀は悲鳴を上げた。なぜなら、そこで、茫茫とした白髪の恐ろしい鬼が、今まさにマルタを食おうと牙を光らせていたからじゃ。

すおうはとっさに光の宝珠を外し、呪文を唱えはじめた。そして手の平から例の光の縄を出すと、鬼に向かって投げ付けた。

ところが、鬼は間一髪でそれをかわし、マルタを抱えたまま後ろに高く跳躍した。そしてそのまま杉の木のとっぺんに乗っかり、せせら笑ってこつちを見下ろす。あんな高さじゃ、光の縄も届かねえと、すおうは歯がみする。

「マルタを返せ！」

銀は梢に向かって叫んだ。

「離さねえと、ただおかねえぞ！」

そしたら、鬼がどなり返して来た。

「何ぬかす。この裏切りもんのガキが！ 人間なんぞにしつぽふりやがって。見せしめにお前の大事なもん奪ってやるんじゃ」

鬼の言葉に佐和が奇妙な顔をする。どういう意味じゃ？ って思っただらう。けど銀にはその意味が分かった。あいつはどうやら

銀が鬼だつて気付いてたらしい。そのくせ人間と仲良くやっているのを憎らしく思つたらしい。

「それで、佐和を食つたのか？」

「そうじゃ、お人好しの女じゃ。お前に化けたら、あっさりひつかかつて着いて来よつたわ」

「マルタにもオレに化けて近付いたのか？」

「違う、この女には死んだガキの姿で近付いたんじゃ」

「本物の小若に化けたのか？」

「そうじゃ。人間なんて哀れなもんよ。気がふれてもわが子の事は忘れられんのじゃのお」

そう言つて、鬼はカラカラと笑つた。銀は怒りのあまり血が逆流するような気がして来る。

と、その時、鬼がぎゃつと悲鳴を上げた。なんじゃ？ と思つて見ると、肩に光の矢が刺さつてる。いつの間にか、杉の木の向こうに回つたすおうが投げておつたらしい。

「マルタを離せ！ 離さんともう一発お見舞いするぞ！」

つて、次の光の矢を片手にすおうが叫ぶ。ところが鬼は憎々しげにすおうを見下ろし、

「誰が離すか」

つて、マルタの首にかぶりついた。

「いけねえ！」

すおうは青ざめた。

…その時だ、銀が高く跳び上がった。跳びながら銀は頭の輪っかに手をかけた。そしてな、それをあっさり外してな、地上に向かつて放り投げてたんじゃ。そしたら、銀の体に光が走つてな、目は赤くなり、黒かつた髪が見る見る真っ白になり、額から角が生えて来る。その姿のまま銀は杉の木のでっぺんまで飛び上がり、額の角を鬼の喉元向けてぐさつとさした。

鈍色の血がほとばしり、鬼が悲鳴を上げた。

生臭い血を浴びて銀は眉しかめた。それで、思いつきり角を引っ

こ抜いた。そしたら鬼はマルタを離し、まっ逆さまに地上に落ちて
った。

いきなり、手を離され、マルタも地上に落ちて行く。慌てて銀は
手を伸ばし、マルタの腕をぎゅっとなつかんだ。マルタは銀を見て笑
って言った。

「お帰り小若」

その言葉を聞いて、銀は泣き笑いみたいな妙な顔をする。

それから、マルタを抱え、枝ぶたいにひゅんひゅん降りてった。
地上に辿り着くと、すおうがあっけにとられてこっち見てる。実は、
銀が跳んでから降りて来るまで、あんまりにも速くて、すおうには
何かなんだか良く分からなかったんだ。けど、とりあえず、銀の変
わり果てた姿だけは良く分かる。

そんな時、はじめて銀は自分が取り返しのつかねえことした事に気
付いた。けど既に遅し。銀は観念した。

「見ての通りさ。オイラは鬼なんだよ」

ってふて腐れたように言う。

知ってたさ……ってすおうは思ったけど何も言わなかった。

その沈黙をどう受け止めたのか、銀はますますやけっぱっちな
って、その場にペタンと腰おろしてこう叫んだ。

「殺せよ。鬼はみんな殺すんだろ？ かまわねえよ。オイラだって
いい加減、世の中が嫌になってたところだったもん」

それを聞いて、すおうは光の宝珠を握りしめた。

……もとより殺すつもりだったんだ。けど、こんなガキ殺すのはか
わいそうで迷ってただけだ。

けど、今鬼を倒したあのすばやさ、恐ろしさはどうだ？ こいつ
はやっぱり尋常の奴じゃねえ。今は子供だから人を食らう事もしら
ねえが、いつかその狂気に目覚めた時、取り返しのつかねえ事にな
るかもしれない。幸いこいつも死にたいって言ってるんだ。何の罪
もねえガキなんか殺したくねえけど、ここは、情け無用でやるしか
ねえかと、覚悟決めたすおうは光の宝珠を額にいただく。それで、

呪文を唱えだした。

そしたらな、佐和の幽霊がびっくりしたみてえに飛んで来て、すおうと銀の間に割り込んだ。

「なんで、止めるんだよ？」

「って、怒ったのはすおうではなく銀だった。」

「止める事ねえだろ？ オイラは鬼だぞ。死ぬしかねえんだぞ。佐和だって言ったじゃねえか。鬼なんて死んじまえばいいってさ」

そしたら、佐和はしきりに首ふってな、涙をぼろぼろ流しはじめた。そして、透けてる手で銀を抱き締めて「ゴメンナ、ゴメンナ……」って謝る。

すおうは宝珠を握ったままで、しばらくその様子見てたけど、やがて、あっさりとそれを首にかけ直した。そいでふて腐れたみたいと言った。

「殺さねえよ、ガキなんか」

銀はびっくりしてすおうを見た。その視線を無視してすおうはさつさと歩き出した。山からおりる気みてえだ。

「いいのかよ？」

銀は叫んだが、すおうは知らん顔さ。銀はすおうの背中を追っかけた。

「待てよ！ 待てったら！」

と、すおうはいきなり立ち止まり、腰かがめて何かを拾った。なんじやって見てる銀に向かって、すおうは今拾ったもんを投げてよこす。受け取るとそれは、破邪の輪じゃ。輪っかは月の光を受けキラリと金色に輝いた。

「それが、お前の力を封じていたんだらう？」

月明かりの下ですおうは言った。

「そうさ」

「って銀は頷く。」

「これをかぶってりゃ、オイラは人間でいられるのさ」

「そうか」

今度はすおうが頷いた。

「じゃ、それかぶつて2度と外すな。そして、どっか遠くの土地でマルタと二人で幸せにくらせ。鬼の事も何もかも忘れてな。そうすれば、お前は一生人間でいられるはずさ。そうすりゃ俺もお前を殺さずにすむ」

「一生人間でいられる？ オイラが？ 本当か？」

「ああ、お前が鬼になりてえと望まない限りはな……」

「謎みてえな言葉さ。けど、銀は大きく頷いた。鬼になりたいなんて望まないさ。望むわけねえさ……」

それから、しばらく後、笹葉の山から銀の姿は消えていた。どこに行ったかは誰にも分からぬ。ただわらべ歌が残されたばかりじゃ。

笹葉の山には鬼がいるとよ

銀色の髪に 赤い目だとよ

月夜の晩に人食らうとよ……

>了<

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9622a/>

銀の系譜

2009年3月15日21時45分発行